

言葉の意味を理解しないで踊らせてしまっているのは「無知」だと思おう



MC RYU

4歳〜18歳までをロスで過ごし、通訳などを経て1993年ラッパーとしてデビュー。日本のヒップホップ・R&Bシーンを支える一人として幅広い層から絶大な支持を得ている。インターFM「TOKYO DANCE PARK」でのMCも大好評。3人の子供の父親という顔も持つ。

ヒップホップはダンスでカッコつけるにはもってこいの素材なんです。本当は、それを始めたアメリカの黒人の歴史や文化などを理解しておいたほうがいいんですけど、少なくとも言葉だけは理解しておいてほしいです。正直、ヒップホップのラップにはいくつも「汚い言葉が入っています。メジャーになつたラッパーはあまり使わなくなるけど、アンダーグラウンドのイカつい音楽には高速のラップにそういう言葉がよく使われています。暴力や攻撃性や犯罪性的な表現など、アンダーグラウンドの黒人達の欲望がスラングで散りばめられているんですね。

だから、本人が意図せずにとんでもない言葉でダンスをしているYouTube動画を、英語を理解する外国人が見て卒倒する、なんてことがあり得るわけです。東京オリンピックを控えて、日本のダンスがグローバルに広がるかもしれない時代に、そこを理解していないで、先生が子供たちを踊らせてしまうことは、僕は正直「無知」だと思います。日本のキッズにまでダンスやヒップホップが広がったとき、実はそこを一番心配していたんですよ。

逆にアメリカではそういう音楽に対する社会的な規制が厳しい。同じ曲でも「クラブバージョン」と「ラジオバージョン」があり、後者はそういった言葉にミニットがかかっています。うっかり「クラブバージョン」をラジオでかかってしまったら、多額の罰金を支払う場合もあるし、公の場所でかけたらスブに

ブーイングが起こります。日本でもそのへんを理解しているDJは、曲をかけながらそういう言葉を抜く(ミニットする)ことができますからね。ダンスサーがそこを回避するためには、日本語の曲で踊ることが一番なんだろうけど、現実はそのかないから、部活ならば先生が洋楽の対訳を汗流して探してチェックすることでしょうね。さっきの「ラジオバージョン」を使うとか。あと、ガンアクションやギャング的な振り付けなどにも意識的になるべきです。一概にそれが駄目というわけではないけど、誤解を受ける可能性がある、というところくらいは知っておいた方がいいと思うんです。それに、黒人のノリやファッションに憧れる、というダンスサーは多いと思うけど、実はそれを黒人は一番嫌がりますよ。ダンスミュージックにもいろいろある音楽があるし、素晴らしい内容の歌詞もたくさんある。ダンスは歌詞の内容や世界観を理解して、それを身体で表現することだから、スラングのチェック以前にすべてのダンスサーは曲が何を歌っているかは知るべきじゃないかなと思います。

厳しいことばかり言うようだけど、日本人のダンスサーは本当に上手だし、みなさんの一生懸命なダンスへの気持ちは世界へ誇れるものだと心から思っています。だって、逆に黒人の高校生はみんなみたいに何十人で揃えて踊る、なんてできないからさ！そういう良さを活かしつつ、学ぶべきことは学び、オリンピックに向けて日本のダンスをアピールして欲しいです！



▶毎週土曜日にオンエアされるダンスラジオ番組「TOKYO DANCE PARK」。毎回、多彩なゲストやDJを迎えて、貴重なトークやダンスミュージックをオンエアする、ダンス初心者がリアルな情報を得るにはびったりの番組。写真は、本誌編集長とダンス部員が出演した時の模様。



ダンス部の

「未来」と「課題」

部活や授業として急速的に教育現場に導入されているダンスだが、ヒップホップダンスの元々のカルチャーとしての成り立ちや、その教育的意義に関してもっと認識を深める必要があるだろう。「課題」を知ることによって「未来」を皆で考えていきたい。「文化面」「教育面」それぞれの識者に語ってもらった。

education

「21世紀を生き抜くための力」を育む
ダンス教育の可能性



岡本 和隆

大学生からダンス活動を始め、8年前より東京都立中学校で保健体育の教員となる。また、東京学芸大こども未来研究所の外部研究員となり、その活動の一環として行っている「DANCE X "cross"」で、学校の先生仲間とダンス研究やサークル活動などを行なっている。

2012年から中学校の保健体育において、武道・ダンスを含めたすべての領域が必修化されました。ダンスは「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」の3つから構成され、仲間との「ミニニケーション」を豊かにすることを重視する運動とされています。その中で「現代的なリズムのダンス」は「創作ダンス」「フォークダンス」に比べ、学習指導要領(文部科学省が示す教育課程の基準)の内容として示された歴史は浅いですが、児童・生徒の興味・関心が高く、最近では様々な授業実践が増えてきています。「現代的なリズムのダンス」は、学習指導要領には「ロックやヒップホップなどの現代的なリズムの曲で踊るダンス」と書かれています。よく誤解されることですが、この「ロック」はダンスの「ロック」ではなく、音楽の「ROCK」なんです。音楽やリズムの特徴をとらえて踊ることが内容なので、ダンスのジャンルについては一切書かれていません。

そのことを踏まえ、私はステップといった「動き」から教えるのではなく、まず仲間と「リズム」に乗ることを楽しみ、「リズム」に乗りながら動きを発展させ、交流したり発表したりする授業を行なっています。その授業を行なう時、仲間とリズムを共有してカラダで遊ぶ(遊ぶ)ことを大切にしています。この「遊ぶ」とは、日常生活とは異なった非日常の世界と捉えており、「遊ぶ」という非日常の世界に入るとき、「恥ずかしくないんだ。間違えてもいいんだ」ということが保証されます。その時に「我(わ)が(わ)の(の)壁

がなくなり、学校の中で全体に溶けこむといった「ミニニケーション」の体験ができるのではないかと考えています。

ダンスの授業とダンス部でも、ダンスの楽しさや喜びの本質は同じだと思いますが、ダンス部の場合には生徒たちが自らダンスを選んでいるところが特徴です。部活でダンス指導を行なう時、全てメニューを指導者が作りそれ通りに活動させても、自ら部活を選んだ生徒たちに対してダンスの楽しさや喜びを味わせることはできません。生徒たちが自ら、ダンスの楽しさや喜びを味わえる工夫をして、自分たちのダンスにしていくな必要があります。このようなダンスの特性と、「自発的・自主的な活動」という部活の意義がリンクすることで、ダンス部が年々盛り上がってきているのではないかと思います。

これからの社会は今よりもさらに変化が激しく、予測が難しくなっています。教育では21世紀を生き抜くために、知識・技能といった「基礎力」に加え、未知の問題に答えを生み出すための「思考力」、多様な価値観を共有する他者との対話を通して現実の問題を解決できる「実践力」が求められています。授業や部活でダンスの楽しさや喜びを味わえた時、もっと楽しくなりたいから自ら行動したり、いろいろな考えたりする生徒たちの姿をたくさんみてきました。ダンスは答えがないものの、自分たちでダンスをする意味を見つけて、みんなでひとつのものを作っていくものだと思えば、これからの世の中で求められる能力を育む学習として、とてもマッチするものだと考えることができるのではないかと思います。



▶岡本先生が代表を務める「DANCE X "cross"」のワークショップ風景。夏に開催する短期集中の先生サークル「先生セッション」では、ダンスの自由さ・楽しさを伝える。

